

日本プロ野球へのビデオ判定の導入 The Introduction of Video Referee to Nippon Professional Baseball

1 K O 7 B O O 7 - 0 渥美 英岳

指導教員 主査 トンプソン リー A. 先生 副査 志々田 文明 先生

この論文では、2010年シーズンから正式にビデオ判定が導入されたプロ野球をテーマに選んだ。プロ野球は、第二次世界大戦後、日本に娯楽が今ほど多くなかった時代から多くの観客の心をつかんできた、歴史の長い商業スポーツの成功例である。しかし、野球がテレビ中継されるようになると、審判の下す判定に対して「誤審」ではないか、との疑問を持つことが可能になった。また、選手や監督が審判の下す判定に、直接グラウンドで抗議するいわゆる「トラブル」も増えてきた。いったい何故、今のような状況になったのか、その理由を探り、プロ野球界がビデオ判定をより良く活用するためにはどのような努力が必要なのか、その答えを探すためにこの論文を書いた。

序章では、戦後すぐからプロ野球審判員を務めた島さんの本を取り上げ、終戦直後にはまだ保たれていた審判の威厳を描いた。

第1章では、近年つぎつぎとさまざまなスポーツでビデオ判定が導入された経緯について述べた。それぞれのスポーツがどのような理由でビデオ判定を導入したのか、を特に着目した。

第2章では、そのような早い段階でスムーズにビデオ判定を導入できたスポーツの共通点を考えてみた。カメラで撮影する空間の少なさ、競技者の少なさ人、ルール of の少なさ、などが考えられた。その一方で、いまだビデオ判定の導入を拒否しているサッカーを取り上げ、なぜ導入しないのか、という理由を示した。

第3章では、プロ野球のビデオ判定導入の背景を知るために、まず実際に審判への抗議がどのように行われたか、複数の試合を取り上げた。その背景にあると考えられる審判制度の変更(6人制から4人制への変更)の原因と結果を知り、また審判への抗議が野球ルールに反するものであるという事実を指摘した。

第4章では、審判員の仕事を客観的に見るために、その募集方法、待遇、年間スケジュールを調べた。またミスジャッジをするとひどく非

難される審判であるが、医学的に見て、その判定という仕事はどのようなものか、脳と視力の働きを調べ、難しさを示した。

第5章では、2010年に正式にビデオ判定が導入されるに至った2006年6月の千葉ロッテ対巨人戦の試合の流れをまず書いた。試合終了後に確認されたビデオの映像で審判の「誤審」に関して、巨人軍の清原代表がこの試合のビデオ映像とともに抗議書をセ・リーグ連盟に提出したことが発端となり、最初は消極的だった連盟が12球団の申し入れを受けて導入の検討を始めた様子を追った。また、2010年シーズンで実際にビデオ判定が使用された試合を詳細に記した。その後、ビデオ判定をより効果的なものにするために作っていかねばいけないと思えるルールを列挙した。

終章では、ビデオ判定をどのように活用していけるのか、分析した。まず、ビデオ映像の限界について述べ、ビデオ判定使用に関してルールが完全でないことを銘記する大切さ、また審判が自信を持って正確な判定を下せるような環境作りをすることの大切さについて述べた。「正確な判定」はすべてのスポーツにとって大切なものであるのは言うまでもないが、機械に頼りすぎ、正確さを至上主義に掲げたスポーツにはおおらかさがないとするコメントを引用し、公正なスポーツ判定とはどのようなものかを分析した。選手、観客、審判の3者が協力して作っていくものだということを強調し、ビデオ判定が、「審判の仕事を審判する」道具になるのではなく、「審判の死角を補う補助的」な道具として理解していく態度が選手・監督にも、観客にも必要だと述べた。どんな制度であれ、各方面からの要望、意見が集約されることで、改良がなされていく過去の例に倣って、プロ野球のビデオ判定制度が良いものになることを期待する。

